
空にだって表情はあるっ

くらいしす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空にだって表情はあるっ

【Nコード】

N4391M

【作者名】

くらいしす

【あらすじ】

「カメラは嘘をつかない」のその後。

ポーカーフェイス崩そうキャンペーンは成功するのか？
主人公の名前は決まるのか？笑

前編・晴天

今日も私と涼は一緒に屋上にいた。

この習慣は私たちが付き合ってからも続いている。
というか続けたい。

1番私たちが幸せな時間だ。
ここなら誰にも邪魔はされないし。

以前と変わったことと言えば、私の頭の位置が涼の膝の上になった
ことぐらいだろうか。

意外とあぐらの上に寝るのは難しい。
下手すると転がり落ちる。

「そういえば、涼って空以外撮るのか？」
ふと疑問に思った。

私は空を撮っている涼しか見たことがない。

「空、だけ。」
まさかの返事

「・・・だけ？」
「ん。」

「・・・最初会ったとき、私撮られたよね？」

「なんか、
空より綺麗だったから。」

・・・どうして無表情でさらっと言っかな。

自分だけ赤面しているのがむかつく。

涼のポーカrfフェイスを崩そうキャンペーンは大変だ。
私が別に男慣れしていたらよかったんだろうけど。
なかなか抱き着くことも出来ない。

というか

こんなこと考えてる自分が有り得なさすぎる・・・。
キャラ崩壊寸前だ。。

悶々と考えていても涼の能面は変わらない。

絶対赤面させてやる。

- n e x t -

後編・夕焼け

帰り道、校舎を出て門に向かっていると涼の姿が目に入った。

特に一緒に帰ることにはしていないし、一年と二年では終わる時間が違うのでそうそう会えないのだが。

たまには一緒に帰ってみるか。

そう思って呼びかけようとした

「りよ・・・」

が、涼は下駄箱から出て来た女の子に囲まれてしまった。

そつだ、涼は人気があるんだった。

私たちはあの変哲な屋上でしか会わない。

お互いに誰かに言う、ということもないので

私たちが付き合っていることは誰も知らない。

仕方ないか。

遠目から見ていると、涼が女の子達に腕を捕まれたり、手を握られてたりしていた。

涼はポーカーフェイスを保っている。

・ん？

なんだ？

何か、イライラする。
なんでだ？

私が道に突っ立て考えていると、
涼と目が合った。

やばっ

冷静に考えれば全く逃げる必要などないが、
訳もなく私の足はスタスタと門へ向かっている。
と、そこに

「先輩。」

涼が後ろから声をかけてきた。
恐る恐る振り返ると、涼のぼけつとした顔と、乙女たちの突き刺さる視線があつた。

なんてことを・・・。

女の子ってどうしてこう恐ろしいのだろう。

私が固まっていると、

「先輩、助けて。」

いや、言葉と顔が合っていないだろ。

「ねえそれってどゆ〜ことお？」

「てかあいつだれえ？」

「なんかびびっちゃってない？」

キヤハハハ、と女の子達は嘲笑した。

めんどろなことになるってしまった。

ギャルの言葉はアホくさくて、私にはどうでもよかったけど。

それにしても助けるって、どうしたらいいんだ。

その時、キャピキャピした声に囲まれている涼の雰囲気が、

・ ・ あれ？

怒ってる？

尖ってきた。

ギャルは気付いていないらしく、涼に構わず話しかける。

「 ・ ・ れよ。」

「 え？何？」

「 どーかしたあ？」

「 ちよつと待った、涼何か ・ ・ 」

一人は気付いたみたいだったがもう遅い。

「 黙れよ。」

ギャルは涼のまさかの言葉に驚いている。

あーあ、やつちゃった。

涼はうるさいとキレるのか、なんて思っていると

「先輩を、悪く言うな」

え！？

原因私！？

「な、何ムキになつてんのぉ？」

「涼あんなのと仲良かったっけ？」

「話してるの見たことないし。」

涼はギャルを一瞥し、私のところまで歩いてきた。

「ど、どした？」

その言葉を見無視して涼は私を腕の中に抱き抱えた。

「先輩は、俺の彼女だ」

・・顔が赤くなっているのを感じた。

でも涼の腕の中なので外に見えることはない。

「えーっ!？」

「聞いてないよっ」

「てかそんなのどこがいいわけっ？」

非難の声が聞こえてくる。

まあシカトしていればそのうち収まるだろう。

しかし、

「じゃあ今ここでキスしてみてよっ」

ギャルの一人が言った。

バカのくせにこんなときだけ悪知恵思いつきやがって。

もぞもぞと動いて顔をだして見上げると、

涼は困っているようだった。

人前でするのは苦手なのか。

屋上だったらいつも迫ってくるくせに・・・。

私は半分呆れた。

「できたら認めてあげるわよ」

「そ、そうよ。恋人なら出来るでしょお？」

お前ら涼に纏わり付いてたんじゃなかったのか。

私は何が何だか分からない。

涼は未だに止まっただまだ。

「出来ないの？」

「その人何にも言わないしい。」

さっきのイライラが沸々と再び沸き上がってきた。
何だこいつら、涼のこと全く分かってない。

涼は追い詰められるのが苦手だ。

どうしたら -

「ホントは嘘なんじゃないのお？」

私はついにキレた。

涼を自分から突き放す。少し涼はよろめいた。

「あ、やっぱり嫌われてんじゃ・・・。」

ギャルはそこで言葉を止めた。

いや、止まってしまった。

涼のネクタイを手元に引き寄せ、
近づいた涼の口に自分のを押し付けた。

ネクタイを緩め涼を解放する。

「これでいいんだろ？」

半ギレ状態でギャルを見ると
揃ってアホ面をしていた。

「う、うわぁぁんっ。」

一人は泣き出して走って行ってしまった。
本気だったのか。

「ちよっ、ミキっ。」

「えっ？待ってよぉ。」

バタバタとギャル達は去って行った。

ほっとして涼を見ると、涼は片手で顔の下半分を覆ってそっぽを向いている。

「・・・？どうした・・・。」

回り込んで覗き込むと、
涼は真っ赤になっていた。

私はクスクスと笑った。

可愛いなあ。

普段はクールなのに、攻められるとダメなのか。

「な、なんだよ。」

「別に？」

私がニコニコしているのが気に入らないらしい。

「帰ろっか。」

「おう。」

ちよつと考えて、

歩き出した涼の手を捕らえる。

そしてこの間親友に教えてもらった『恋人繋ぎ』というもので、涼の手を握ってみた。

「なっ・・・!？」

「どうかした？」

ニヤニヤしながら聞いてみる。

涼は赤すぎて顔から湯気が出そうだ。

「・・・別に。」

そういつて私の手を握り返した。

私たちはずっと手を繋いだまま、帰っていった。

・そのせいか、それともギャルのせいか。

翌日には私たちのことが知れ渡っていた。

色々言われたりもしたけど、屋上はいつも通り平和だったとさ。

-
おわり
-

後編・夕焼け（後書き）

「カメラは嘘をつかない」
番外編でした。

ふざけまくりですいません；w
これはバカップルに入るんでしょうか？

ちなみに番外編はもう一つ考えてるんで、
お楽しみにーw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4391m/>

空にだって表情はあるっ

2010年10月9日09時41分発行